

# 相貌と性格の仮定された関連性 (1)\*

—— 対をなす刺激人物の評定値の比較による検討 ——

大橋正夫 長戸啓子 平林進<sup>1)</sup>  
吉田俊和<sup>2)</sup> 林文俊<sup>3)</sup> 津村俊充<sup>3)</sup>  
小川浩<sup>4)</sup>

## 問 題

パーソナリティの印象形成の問題を組織的に研究する方法を発展させたのは、周知のとおり、Asch (1946) であった。彼はある架空の人物 (刺激人物、以下これを S P と略記する) を記述するものとして数個の性格特性 (形容詞) を被験者に読んで聞かせ、その人物について形成された印象を自由に記述するか、チェック・リストに回答することによって答えさせたのである。このような paradigm に従った研究は、Asch タイプと呼ばれている。しかしながら最近では、印象形成研究の大部分は、Anderson タイプとでも言ってよいような方法をとるようになった。すなわち、S P についての生き生きとした印象を被験者に形成させようとしてそれを分析するというよりは、S P をたんにある評価的尺度の上で評定することが求められる。そして、その値が、与えられる個々の刺激特性の同じ尺度上での評価値から、どのように予測されるか、という問題に関心が移ってきている。そしてその予測のための数量モデルがいくつか提唱された。その最初のものが、Anderson (1962) による単純平均モデルであった。

Asch (1946) に対する批判の最初のもは、その場面があまりにも人為的であり、現実の対人関係とは遊離し

すぎている、というものであった (Kelley, 1950)。そこで Kelley は、S P として実在の人物を用いている。Asch の構成した場面が人為的であるとすれば、最近の Anderson タイプの研究で用いられている場面は、さらに人為的で抽象的であるといわなければならないであろう。あるいは、それはもはや印象形成過程の研究ではなくて、印象形成場面を利用した、判断過程の一般的性質についての研究である、とさえ言うことができる。少なくとも Anderson の最近の論文 (1975) では、印象形成の問題はそのような扱いを受けている。

われわれの研究も Anderson タイプのそれから始められた (大橋ほか, 1971)。すなわち、ここでは単純平均モデルの妥当性に影響すると考えられるいくつかの要因の効果が吟味された。したがって、その研究は平均モデルをより sophisticated することを目的としていたといえる。しかし、研究を重ねていくうちに、このような方向では、われわれが究極的に目指しているところの、対人関係の心理学の体系を樹立することに寄与することは困難である、と感ずるようになった。したがって、同じく言語刺激を用いて印象形成過程の究明をするにしても、それを数量的に解析するというよりは、それを質的に分析するための合理的方法を探索するという方向へ展開する必要性があることが指摘された (大橋ほか, 1973)。

ところで、日常生活においてわれわれが他人のパーソナリティの印象を形成するさいに利用している手がかりは、ひとり言語的なそれにとどまらないことは、あらためて言うまでもない。そのうちの有力な一つに、相手の容貌がある。われわれは、一般にはそれを明確に言語化することはできないけれど、容貌はある程度まで性格を表現していること、したがって容貌の特徴と性格特性の間にはある種の関連性があると信じていることが多い。あるいは少なくとも、多くの人は相手の容貌に依拠して初対面の人の性格についてある判断をしている。すなわ

\* 本研究の結果の一部は日本グループダイナミクス学会第23回大会において報告された。また、本研究の資料分析のための計算は、名古屋大学大型計算機センターの FACOM 230-60 によった。

1) 名古屋女子大学講師  
2) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程 (後期課程) 教育心理学専攻  
3) 同 博士課程 (前期課程) 教育心理学専攻  
4) 愛知県がんセンター研究所疫学部研究員

ち, implicit personality theory は, 性格特性の間の関連性だけでなく, 容貌と性格の間の関連性をもその内容として含んでいるのがふつうであろう。

顔や身体的特徴と性格との関連性を組織的に記述したものが相貌学 physiognomy である。これはすでにギリシャ時代から存在していたという (依田, 1968)。しかし相貌学は, 学というよりはむしろ術であって, 理論的根拠にとぼしい。そのうえ時には人びとをまどわせたりしたため, 権力によって迫害され, また非科学的であるとしてアカデミックな心理学から追放されるという羽目に陥ったのである。しかしながら, Kretschmer (1936) や Sheldon (1942) の類型論において, 体型と気質の関連性が主張されているところからしても, 容貌と性格の間に関連性がないと主張することのほうが, むしろ独断的であるというそしりを受けなくてはなるまい。また, その妥当性はしばらくおくとしても, 人びとが, 暗黙のうちにせよ, そのような関連性についてある信念なり仮定なりをもっているとするれば, われわれはそれを研究する意義があると考え。それは Heider (1958) のいう素朴心理学 naive psychology の一部を成すものであり, ことに対人関係の心理学のような進歩のおくれている心理学の領域においては, 重要な研究主題である。

さて, 人びとが相貌的特徴と性格の間に想定している関連性を明らかにするために, それについての directive な質問をし, 言語的な応答を得てそれを分析するという方法は, あまり効果的であることが期待されない。なぜならば, そのような関連性についての信念なり仮定なりは, そのほとんどが暗黙のものであり, それを言語化して表現することは特別な人を除いては困難であると考えられるからである。このため, これまでこの関連性を明らかにするためにとられた方法は, より間接的なものであった。たとえば Brunswik (1947) は, いろんな顔の特徴を線画によって描写し, それから得られる印象を分析している。すなわち, 一定の顔の輪郭の中に眼, 鼻および口を描いたのであるが, その場合, 額の長さ (眼の高さ), 両眼の間隔, 鼻の位置と長さ, および口の位置をそれぞれ 3, 3, 7 および 3 通りに変化させて, 合計 189 種類の刺激を用意したのである。そして, それぞれの顔の部分が印象を決定するのにどのように寄与しているかを明らかにしようとした。

しかしながら, この仮定された関連性を究明するためにもっとも多く採用されたのは, 人の顔写真を提示してその性格を推定させる, という方法である。そして, そのさい働く推論の過程には様々なものがあることが報告されている。Secord (1958) はそれらを, (1) 時間的拡張の過程, (2) 重要な他者からの一般化, (3) 範ちゅう化, (4)

機能的性質に基づく推論, および (5) 隠喩的一般化の 5 つにまとめている。

われわれも顔写真を用いて印象形成過程を明らかにするための準備を進めてきた。すなわち, 90 枚の女子大学生の写真の中から, 形成される印象ができるだけ相互に異なるような, いわば代表的な刺激を選び出し (大橋ほか, 1972), ついで印象を評定させるために適当な尺度項目の構成を試みた (大橋ほか, 1973)。顔写真は, たとえば Brunswik (1947) が用いたような描画にくらべて, 明らかにリアルであり, 人びとが日常生活において行なっている印象形成場面に近いものを提供する。しかし, 含まれる情報量が非常に大きいため, 形成される印象の決定に寄与する要因を確認するのが困難である。したがってこのような方法だけでは, 相貌と性格の間に人びとが仮定している関連性を究明するのに不十分であると言わなければならない。

そこで考えられる一つの方法は, 刺激を言語的に与える方法である。すなわち, S P の相貌的特徴を, 描画や写真ではなくて, 言語によって記述し, その性格を推定させるのである。もちろんこれと反対の方向をとることも可能である。すなわち, 性格を描写する文章を被験者に与えて, それから S P の相貌を推定させるという方法である。個々の相貌特徴もけっして独立に存在するものではなからうが, いくつかの性格特性のほうが相互により強い関連性をもっていると考えられる。したがって, 複数の刺激を組み合わせて S P を記述するとすれば, 相貌特徴を用いるよりも, 性格特性を用いるほうがより生き生きとした叙述を提供する可能性が大きいであろう。それは文芸作家が登場人物を描写するために常に用いている方法であり, 被験者により familiar でもあろう。このような方法を用いて性格と相貌についての仮定された関連性を究明しようとしたものに, Johnson (1955) の研究がある。

彼女は大学生の被験者に 2 人の S P を記述する短い文章 (各約 30 語) を与え, その相貌的特徴を 32 の 7 点尺度上で推定させた。一方の S P はすべての点で望ましい性格をもつように記述されたのに対し, 他方はそれとは対照的にネガティブな人物として記述されていた。被験者は推定にさいしてほとんど困難を訴えなかったばかりでなく, 32 尺度中 25 尺度において, 両 S P の平均評定値の間には有意な差があることが見いだされたのである。

Johnson の研究には方法的にみていくつかの問題点を指摘することができる。まず, 被験者に対照的な 2 人の S P の記述が与えられた点に問題がある。そのため, 評定にさいして対比効果が生じたのではないかと考えられる。また Orne (1962) のいう demand characteristics

が働いていた可能性も否定できない。つぎに、関連する数個の性格特性を組み合わせさせて記述したため、個々の特性がどのように評定に寄与していたかは明らかにされえない。それらが単純に加算的に寄与したのか、より複雑な相互作用が存在したのか、解明する方法はないのである。

それにもかかわらず、用いた被験者が僅か21名という少数であったのに、このような明確な結果が得られた点は注目し得る。そこでわれわれは、彼女の研究を参考として、相貌と性格の間に人びとが仮定している関連性を組織的に究明していくこととした。本研究では、その第1段階として、単一の刺激をS Pの属性として提示し、いくつかの尺度の上で評定させることにする。なお刺激としては性格特性を選び、相貌的特徴の尺度の上でS Pを評定させる場合と、逆に相貌的特徴を刺激としてS Pを性格特性の尺度上で評定させる場合の両方を設定し、比較することにする。

## 方 法

### 1. 刺激および評定尺度のための特性・特徴の選択

性格特性・S Pを記述するための刺激、あるいは評定尺度の両極を記述するための項目として用いる性格特性としては、10対20個が選ばれた。このうち8対16個は、大橋ほか(1973)において、写真からの印象を評定させるのに有効であることが確認された10対20個の中に含まれている。これに、「知的でない-知的な」、および、「内向的な-外向的な」という2対4個を加えたものである。それらは表3に示されている。

相貌特徴。これは今回初めて使用するの、予備調査を行なって決定することにした。まずJohnson(1955)を参考にし、それに性格を推定するための手がかりとして有効であるかもしれないものを追加して、合計40対80個の相貌特徴が選ばれた。これによって40の7点両極尺度を構成し、その上でS Pを評定することを求めたのである。S Pは上記20個の性格特性の1個によって記述され、1人の被験者には4人のS Pが与えられた。評定の信頼性をみるために、被験者は1週間の間隔において、同じS Pについて2度にわたって評定をした。被験者には2群の女子大学生が与えられた。1群(N=317、以下これを対評定群という)では、与えられる4人のS Pは、2対の性格特性によって記述されたものである。他の群(N=353、非対評定群)では、S Pを記述するための4特性は対をなしていない。この予備調査の結果から、信頼性の高い25の相貌尺度を選択した。そのさいの基準としては、(1)2回の評定値の間の相関係数が高いこと、および(2)対をなす性格特性の評定値が中性点をは

さんで両側にあり、差が大きいようなケースが多いこと、の2を用いた。選ばれた尺度は表4に示してある。

### 2. 調査Ⅰ(性格→相貌の評定)

これは、1個の性格特性で記述されたS Pが、25の相貌尺度のおのおのにおいて、平均的にどのような点にあると思うかに従って、被験者に評定を求めるという形式のものである。S Pとしては、女子大学生を想定するようにと教示した。被験者としては、2群の女子大学生を用いた。

第1群は、主要な分析の対象となる資料の収集のための被験者である。第1回目に5個の性格特性の1個により記述される5人のS P、その1週間後にそれと異なる性格特性により記述される5人のS Pが与えられた。10個の特性はいずれも対をなしていない。これは予備調査において、対をなす特性によって記述されたS Pの平均評定値の差が、非対評定群よりも対評定群においてより大きかったためにとられた措置である。分析の対象とされた標本数は253であった。

第2群は評定の信頼性をチェックするためのものであった。すなわち、1週間の間隔において、5人のS Pを繰り返し評定することが求められた。10対のうちの5対の一方の特性を用いて記述したS Pが54名に、他の5対を用いて記述したS Pが51名の被験者に与えられた。

なお、被験者は各評定のさいの確信度を4段階で答えることが求められた。

### 3. 調査Ⅱ(相貌→性格の評定)

これは調査Ⅰの刺激と尺度を入れ替えたものに相当する。被験者は1個の相貌特徴によって記述されるS Pを性格の10の7点尺度上で評定することが求められたのである。同一の被験者には、25の相貌特徴対のそれぞれの一方によって記述される25人のS Pが与えられた。1週間の間隔において2度に分けて評定させられた。この場合にも確信度を答えることが求められた。分析の対象とされた被験者数は251であった。

調査Ⅱにおいては、信頼性をチェックするための資料はとられなかった。なお、ここに記述しなかった諸点に関しては、すべて調査Ⅰと同じ条件が保たれるように配慮された。

## 結 果

### 1. 評定の信頼性

調査Ⅰおよび予備調査において、性格特性を刺激として相貌尺度上で評定するさいの信頼性をみるために、1週間の間隔において再調査が実施された。予備調査では、

相貌と性格の仮定された関連性（1）

被験者は4人のSPについて40尺度上で評定し、調査Iにおいては5人のSPについて25尺度上で評定したわけであるが、特性×尺度の数でいうと、前者は800、後者は250である。相関係数についてみると、5%水準で有意ではないケースは前者では対評定群で334（41.8%）、非対評定群で377（47.1%）と、いずれも相当数にのぼっている。これに対して調査Iで相関係数が有意とならなかったケースは41（16.4%）で、かなり少くなっている。また、両回の平均評定値の差を推定してみたところ、5%水準で有意なt値が得られたケースの数は、予備調査の対評定群で57（7.1%）、同じく非対評定群では55（6.9%）であるのに対して、調査Iでは30（12.0%）であった。このように両回の評定値の相関係数で有意にならないケースの比率が、予備調査におけるよりも調査Iにおいて少いことは、後者において信頼性がより高いことを意味している。平均の差が有意となることは、ある意味では信頼性が低いことを示しているが、その差はたんなる偶然誤差によるものではないことが示唆されているとすれば、そのようなケースの比率が高いことが、そのまま信頼性が低いことを物語るとは断定できないであろう。

相関係数という角度からみると、調査Iの信頼性は予備調査のそれよりも高いようである。しかし、これは考えてみればむしろ当然の結果といえる。というのは、予備調査で用いられた40尺度の中から、相関係数が比較的高いものを選び出して調査Iを構成したのであるからである。また、予備調査では、被験者は40という多数の尺度上でSPを評定させられたため、負担が大きく、評定もそれだけ粗雑になった、というようなことも考え

られる。

さてここで、調査Iに関する資料について、2回の評定の間相関係数および平均の差の検定におけるt値が、どのような分布をしているかをみてみよう。表1は10の刺激特性ごとにその概要を示したものである。

表1によると、相関係数は最大値でも0.57～0.78の範囲にとどまり、高いとは言えない。最小値には有意ではないが負のものもみられる。中央値でみると、0.34～0.53の範囲にあり、10特性を通しての相関係数の中央値は約0.43となっている。10特性×25尺度の合計250のケースのうち、相関係数が正の有意な値を示さなかった場合が41（16.4%）もみられたこととあわせ考えれば、調査Iの信頼性は総じて高くはないと言わなくてはならない。また信頼性の高さは用いる刺激特性によって若干の差異があるようである。中央値でみるかぎり、比較的高いのは「知的な」であるのに対し、ことに低いのは「消極的な」と「無分別な」の2つにおいてであった。

つぎに2回の評定で得られた平均評定値の差をt検定した結果をみてみよう。評定の信頼性が十分に高ければtの値は有意とはならないはずであるが、有意となったケースが合計30（12.0%）あった。中でも、「はおのこけたーほおのふくらした」という尺度上で「親しみやすい」という特性を評定した場合の平均値は5.92および5.55で、きわめて大きな有意差があった。しかしながら相関係数という観点からして信頼性が低かった2つの特性では、有意差はほとんど出ていない。逆に多くの有意差が見られた「親しみやすい」は、相関係数からみるかぎり信頼性は中程度である。したがって、前述したように、再評定における平均値の差がないことは評定の信頼性の高いことを必ずしも意味しないし、その違も同様に言えるようである。

つぎに、2回の評定の間相関係数と平均の差のt検定で得られたt値を25の尺度別にみてみたのが表2である。

まず相関係数についてみると、全体としては刺激特性ごとにみた場合と同じであることは当然であるが、その場合と比べて、尺度によるバラツキは比較的小さいようである。そのことは、最大値、最小値、中央値、有意でない刺激特性の数の、いずれについてもいえる。ただ、「眉の八の字のー眉の逆八の字の」という尺度だけは、他の尺度とくらべてややとびはなれて相関係数の中央値が低いことが注目される程度である。

t値においても、相関係数と同様、尺度間のバラツキはあまりないようである。

## 2. 両方向からの評定値からみた関連性

調査Iでは被験者はある単一の性格特性の持主を25の

表1 再調査による信頼性（性格特性格別）

性 格 特 性	相 関 係 数				t 値			
	最 大 値	最 小 値	中 央 値	有 意 で な い 数	最 大 値	最 小 値	中 央 値	有 意 な 数
1. 消 極 的 な	.57	-.03	.34	8	1.85	0.00	0.53	0
2. 心 の ひ ろ い	.63	.12	.47	5	3.60	0.00	0.55	2
3. 無 分 別 な	.65	.17	.34	7	3.05	0.00	0.56	1
4. 責 任 感 の あ る	.69	-.06	.42	6	2.31	0.00	0.60	3
5. 感 じ の わ る い	.77	.17	.48	1	2.36	0.00	0.69	2
6. 親 し み や す い	.78	-.05	.43	2	3.85	0.13	1.37	8
7. 短 気 な	.59	.05	.37	4	3.13	0.00	0.74	4
8. 親 切 な	.72	.08	.43	2	3.00	0.00	0.88	4
9. 知 的 な	.71	.21	.53	1	2.22	0.00	0.88	1
10. 内 向 的 な	.67	.14	.47	5	3.73	0.00	1.28	5

表2 再調査による信頼性 (相貌尺度別)

相 貌 尺 度	相 関 係 数				t 値			
	最	最	中	有	最	最	中	有
	大	小	央	意	大	小	央	意
	値	値	値	で	値	値	値	な
				ない				数
				数				
1. 顔の大きい - 顔の小さい	.62	.18	.54	1	3.05	0.00	0.99	1
2. 面長の - 丸顔の	.63	.24	.51	1	2.21	0.12	0.74	2
3. 額の広い - 額の狭い	.64	.19	.38	2	1.82	0.11	1.10	1
4. ほおのこけた - ほおのふっくらした	.77	.21	.51	1	3.85	0.60	1.53	3
5. 顔のきめの細かい - 顔のきめの荒い	.59	.08	.40	2	2.26	0.27	0.68	1
6. 色の黒い - 色の白い	.65	.17	.53	1	3.73	0.00	0.75	1
7. 血色のよい - 血色のわるい	.78	.21	.56	2	2.22	0.00	0.87	1
8. 髪の毛のやわらかい - 髪の毛のかたい	.65	.20	.41	2	0.96	0.25	0.64	0
9. 目のまるい - 目の細い	.72	.14	.54	2	2.45	0.00	0.32	2
10. あがり目の - さがり目の	.67	.27	.40	1	3.64	0.10	0.60	1
11. 目の大きい - 目の小さい	.59	.05	.35	3	1.72	0.00	0.37	0
12. まつ毛の長い - まつ毛の短い	.62	-.05	.32	3	1.48	0.00	0.70	0
13. 眉の細い - 眉の太い	.60	.07	.42	1	2.94	0.00	0.47	1
14. 眉の八の字型の - 眉の逆八の字型の	.49	.08	.31	2	1.81	0.00	0.54	0
15. 鼻の高い - 鼻の低い	.66	.19	.43	1	3.66	0.10	1.35	3
16. 鼻の穴の小さい - 鼻の穴の大きい	.55	-.06	.41	3	1.99	0.00	0.52	0
17. かぎ鼻の - 鼻のまっすぐな	.50	.14	.42	1	1.26	0.00	0.18	0
18. 口の小さい - 口の大きい	.61	.15	.39	2	2.16	0.20	1.14	3
19. 唇の厚い - 唇の薄い	.75	.08	.49	2	3.00	0.00	0.79	1
20. 口もとのゆるんだ - 口もとのひきしまった	.71	.26	.57	1	1.66	0.00	0.87	0
21. 歯ならびのよい - 歯ならびの悪い	.56	.25	.41	1	1.18	0.21	0.42	0
22. 耳の大きい - 耳の小さい	.78	.21	.38	1	3.09	0.20	0.91	2
23. やせた - ふとった	.69	.30	.54	0	2.64	0.38	1.01	3
24. 背の低い - 背の高い	.60	-.03	.43	2	2.29	0.13	1.02	1
25. 骨太の - 骨の細い	.54	.04	.39	3	2.92	0.00	0.93	3

相貌尺度上で評定させられた。つまり性格→相貌という評定をしたのである。それに対して調査Ⅱでは相貌→性格という評定が行なわれた。この2つの方向から、性格と相貌の間に被験者が仮定している暗黙のうちの関連性をさぐるというわけである、両調査とも用いられた尺度は7点尺度であるので、各点への評定を左から右へ、1～7の値を与えて評定を数値化することにする。個々の刺激および尺度ごとに平均と標準偏差を求めたものが表3および表4に示してある\*。

性格特性と相貌特徴の間に仮定された関連性の有無ならびにその程度を調べるために、対をなす2つの刺激の各尺度上での平均評定値の差をt検定することにした。

\*両調査とも、同様に確信度も答えさせたのであるが、刺激別、尺度別にその平均値を比較したところ、ほとんど差がみられなかったので、省略する。

この結果は表5に示すとおりである。表では行に25の相貌の対、列に10の性格特性の対が、それぞれポジティブと考えられる極によって表わされている。\*はその極から考えて正の関連性を示す方向に有意差があったこと、また×は負の関連性を示す方向に有意差があったことを示す。また各セルの右上には調査Ⅰの結果、左下には調査Ⅱの結果を表わしている。印1個は5%、2個は1%水準での有意差を、また印のないことは差が有意ではなかったことを表わしている。例えば、1行1列は、調査Ⅰで積極的な人は消極的な人よりも有意(1%水準)に顔が大きいと評定され、かつ、調査Ⅱで顔の大きい人は顔の小さい人より同様に有意に積極的であると評定された、ということの意味している。また6行3列は、調査Ⅰで分別のある人は無分別な人よりも有意に色が白いと評定されたが、調査Ⅱでは色の黒い人と白い人についての「無分別な-分別のある」という尺度上での平均評定

相貌と性格の仮定された関連性 (1)

表 3 調査 I の結果 (性格→相貌の評定値)

相貌尺度	刺激特性	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10	
		消極的	積極的	心のひろい	心のせまい	無分別	分別のある	責任感のある	責任感のない	感じのわるい	感じのよい	親しみやすい	親しみにくい	短気	気長	親切	不親切	知的	知的でない	内向的	外向的
1	$\bar{X}$ s	5.01 1.16	3.30 1.17	2.70 0.87	5.02 1.02	3.95 1.14	3.63 1.10	3.43 1.01	4.29 1.23	4.02 1.33	3.84 1.18	3.41 0.98	4.53 1.24	4.46 1.06	3.10 1.24	3.55 0.97	4.49 1.14	4.53 1.12	3.37 1.37	5.11 0.92	2.98 1.20
2	$\bar{X}$ s	3.45 1.08	4.32 1.13	5.10 1.05	3.33 0.93	3.75 1.06	3.69 1.08	3.90 1.11	4.05 1.12	3.23 1.15	4.63 1.23	5.37 1.06	2.77 0.84	3.37 0.97	4.58 1.40	4.87 1.12	3.14 1.04	3.06 0.90	4.78 0.97	3.53 1.18	4.70 1.32
3	$\bar{X}$ s	5.02 1.07	3.33 1.15	3.00 1.05	5.14 1.05	4.60 1.04	3.08 1.12	3.24 1.13	4.75 1.15	4.96 1.18	3.19 1.04	3.34 0.90	4.69 1.17	4.79 0.92	3.07 1.01	3.25 0.87	4.82 1.11	3.08 1.32	4.89 1.41	4.76 0.96	3.07 1.11
4	$\bar{X}$ s	3.17 1.22	4.63 1.12	5.49 0.86	2.80 0.90	3.56 1.11	4.39 0.94	4.39 0.90	3.68 1.24	2.71 1.13	5.26 0.91	5.47 0.99	2.45 0.89	2.76 0.95	5.52 1.00	5.20 0.89	2.81 0.99	3.53 0.95	4.54 1.11	3.34 1.13	5.28 0.97
5	$\bar{X}$ s	3.32 0.99	4.40 0.99	3.91 1.02	3.63 1.06	4.62 0.92	3.60 0.79	3.54 0.87	4.30 0.96	4.95 1.30	3.03 0.97	3.70 0.88	4.27 1.08	4.23 0.98	3.58 1.08	3.43 0.89	4.34 1.12	3.16 0.94	4.67 1.12	3.36 0.85	3.89 1.13
6	$\bar{X}$ s	5.35 1.01	2.84 0.96	3.55 1.02	4.68 1.08	3.56 1.05	4.05 0.80	3.56 1.06	4.34 1.04	4.28 1.36	4.07 1.11	3.62 1.07	4.56 1.07	3.91 1.28	4.44 1.18	4.28 0.93	4.22 1.09	4.84 1.05	3.60 1.19	5.35 0.92	3.22 1.22
7	$\bar{X}$ s	5.44 1.12	2.33 0.95	2.51 0.98	5.37 0.86	4.60 1.05	3.08 1.00	2.75 0.92	4.64 1.18	5.54 1.12	2.23 0.93	2.46 0.94	5.65 0.95	4.45 1.32	2.97 1.05	2.80 0.97	5.12 1.02	3.98 1.09	4.11 1.17	5.02 1.07	2.39 1.01
8	$\bar{X}$ s	3.54 0.93	4.33 0.88	3.76 0.88	4.14 0.98	4.50 0.93	3.88 0.88	4.06 1.03	4.01 0.97	4.71 1.12	2.97 1.03	3.53 0.86	4.60 0.97	4.46 1.01	3.59 0.95	3.41 0.82	4.38 1.02	3.58 1.05	4.28 1.16	3.46 0.94	3.77 0.95
9	$\bar{X}$ s	4.91 1.01	3.42 0.93	3.15 0.95	4.89 0.94	4.48 1.06	3.87 0.91	3.66 1.01	4.23 1.08	5.04 1.10	2.86 1.05	2.98 0.92	5.07 1.01	4.61 1.06	3.67 1.08	3.33 1.00	4.74 1.14	4.21 1.00	3.88 1.05	4.49 1.08	3.04 1.07
10	$\bar{X}$ s	4.61 1.02	3.58 0.98	4.65 0.93	3.54 1.19	3.62 1.00	3.97 0.86	3.78 0.96	4.34 1.09	2.84 1.21	4.68 0.94	5.09 0.99	2.48 1.04	2.82 0.95	5.02 0.98	4.83 0.83	2.10 1.12	3.43 0.77	4.80 1.16	4.52 0.85	4.35 1.12
11	$\bar{X}$ s	4.92 0.87	3.26 0.80	3.31 1.09	4.76 0.90	4.35 1.02	3.71 0.78	3.60 0.91	4.44 0.95	4.77 1.19	3.05 0.95	3.22 1.01	4.59 1.04	4.33 0.97	4.03 1.02	3.61 0.89	4.50 1.09	3.71 1.01	4.06 1.11	4.72 1.03	2.94 0.95
12	$\bar{X}$ s	4.24 0.94	3.94 0.75	3.62 0.87	4.34 0.81	4.38 0.96	3.79 0.71	3.85 0.78	4.21 0.71	4.48 1.15	3.07 0.97	3.68 0.72	4.31 0.83	4.30 0.80	3.92 0.89	3.68 0.71	4.26 0.96	3.54 0.91	4.18 1.07	3.89 1.07	3.38 0.98
13	$\bar{X}$ s	3.33 1.05	4.74 1.05	4.66 0.84	3.20 0.97	3.85 1.08	4.41 0.99	4.77 1.09	3.60 1.21	3.63 1.41	4.05 0.87	4.22 0.80	3.61 1.12	4.05 1.32	4.14 1.24	4.03 0.84	3.30 1.07	3.79 1.15	4.17 1.18	3.31 0.87	4.15 1.07
14	$\bar{X}$ s	3.34 1.11	4.26 0.95	3.49 0.96	4.38 1.18	4.53 1.08	3.96 0.77	4.10 1.03	3.72 1.10	4.81 1.30	3.40 0.96	3.21 0.99	5.03 1.13	4.91 1.17	3.11 1.07	3.32 0.88	4.91 1.23	4.15 0.87	3.70 1.20	3.48 1.02	3.68 1.03
15	$\bar{X}$ s	4.37 0.93	3.57 0.96	4.18 0.92	3.82 1.07	4.18 0.97	3.49 0.93	3.57 0.93	4.30 0.96	3.77 1.25	3.74 1.17	4.60 0.95	3.17 1.09	3.36 0.93	4.61 0.98	4.41 0.84	3.34 1.17	2.82 0.98	4.85 1.12	4.32 0.97	3.81 1.13
16	$\bar{X}$ s	3.45 1.04	4.53 0.86	4.53 0.87	3.48 0.92	4.23 0.98	3.95 0.85	4.18 0.77	3.98 0.94	4.45 1.12	3.65 0.90	4.08 0.72	3.90 0.81	4.14 0.90	3.98 0.98	4.02 0.77	3.83 0.90	3.55 0.88	4.48 1.20	3.44 0.86	4.36 0.94
17	$\bar{X}$ s	4.17 1.02	4.27 0.98	4.41 0.94	3.87 1.16	3.85 1.02	4.50 0.93	4.48 1.00	3.83 0.88	3.19 1.26	5.02 0.97	4.62 0.85	3.31 1.21	3.78 1.07	4.37 0.90	4.51 0.81	3.71 1.18	4.74 1.07	3.70 1.04	4.34 0.80	4.56 0.87
18	$\bar{X}$ s	2.94 1.15	5.14 0.98	4.81 0.90	3.14 0.95	4.59 1.03	4.00 0.98	4.13 0.99	4.05 1.17	4.34 1.36	3.77 1.06	4.50 0.97	3.82 1.09	3.95 1.03	3.94 1.16	4.19 0.98	3.71 1.03	3.39 1.01	4.81 1.21	2.76 0.82	4.85 1.08
19	$\bar{X}$ s	4.77 1.21	3.53 1.13	3.53 0.92	4.79 1.00	3.91 1.27	4.04 1.08	3.89 1.06	4.48 1.21	3.83 1.54	4.10 0.98	3.89 0.86	4.18 1.21	4.34 1.12	3.82 1.02	3.80 0.87	4.64 1.18	4.62 1.14	3.20 1.15	4.75 1.16	3.83 1.17
20	$\bar{X}$ s	3.98 1.22	4.85 1.24	4.15 1.18	4.18 1.09	2.87 1.20	5.29 1.15	5.53 1.15	3.08 1.28	2.96 1.48	5.23 1.08	3.95 1.12	4.14 1.32	4.77 0.97	3.81 1.32	4.08 1.12	4.18 1.16	5.64 1.08	2.48 1.34	4.23 1.04	4.28 1.23
21	$\bar{X}$ s	3.98 0.90	3.66 1.03	3.65 0.81	4.09 1.05	4.77 0.98	3.42 0.96	3.21 1.03	4.55 0.97	5.05 1.25	2.77 1.22	3.49 1.03	4.40 1.02	4.06 0.82	3.77 0.77	3.51 0.78	4.22 0.85	3.07 1.12	4.89 1.20	3.93 0.87	3.30 0.96
22	$\bar{X}$ s	4.73 1.01	3.27 1.02	3.10 0.95	4.82 0.92	4.39 1.03	3.62 0.90	3.46 0.96	4.43 0.91	4.01 1.04	3.70 0.91	3.73 0.70	4.14 0.86	4.20 0.86	3.54 1.07	3.72 0.82	4.49 0.91	3.80 1.10	4.36 1.18	4.53 0.87	3.42 1.00
23	$\bar{X}$ s	3.44 1.17	3.87 1.06	5.23 0.87	3.10 1.00	3.90 1.08	3.84 0.93	3.97 0.85	4.14 1.25	3.57 1.29	4.28 0.98	4.86 0.89	3.23 0.95	3.09 1.17	5.06 1.21	4.69 1.06	3.17 1.10	2.91 0.92	4.81 1.14	3.20 1.06	4.26 1.20
24	$\bar{X}$ s	3.60 1.02	4.32 0.99	4.24 0.81	3.86 0.92	3.94 0.84	4.25 0.82	4.39 0.91	3.84 0.91	3.84 1.10	4.45 0.94	3.67 0.76	4.36 0.91	4.06 0.92	3.94 1.09	3.96 0.86	4.20 0.92	4.76 0.90	3.64 1.02	3.38 0.87	4.48 0.91
25	$\bar{X}$ s	4.97 1.07	3.24 0.99	3.31 1.01	4.73 0.95	3.83 1.02	3.78 0.80	3.47 0.96	4.33 1.00	4.21 1.06	4.02 0.81	3.85 0.66	4.37 0.95	4.21 1.14	3.51 1.07	3.91 0.75	4.46 1.00	4.63 0.92	3.73 1.05	4.78 0.98	3.68 1.01

値に有意差がない、ということを表わしている。

これによると、調査 I と II の両方において有意差のみられる場合は、250 のうちの 195、すなわち全体の 78%

を占めていることがわかる。またいずれにおいても有意差のみられない場合はわずかに 12 (4.8%) にすぎない。そして、残りの 43 の場合 (17.2%) では一方の調査で有

表 4 調査Ⅱの結果 (相貌→性格の評定値)

刺激特徴	性格尺度									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	$\bar{X}$ s	$\bar{X}$ s	$\bar{X}$ s	$\bar{X}$ s	$\bar{X}$ s	$\bar{X}$ s	$\bar{X}$ s	$\bar{X}$ s	$\bar{X}$ s	$\bar{X}$ s
1 { 顔の大きい 顔の小さい	4.97 1.05	2.95 1.08	4.15 0.79	3.75 1.04	4.35 1.15	3.20 1.20	4.72 1.24	3.41 0.95	3.64 0.96	4.87 1.17
	3.34 1.13	4.36 1.02	4.48 0.92	3.86 0.98	4.50 1.00	3.88 1.13	3.66 1.20	3.72 0.94	4.60 1.18	3.43 1.30
2 { 面長の 丸顔の	3.73 1.12	2.24 1.04	4.63 0.99	3.71 1.02	4.33 0.96	4.20 1.15	4.05 1.29	3.81 0.99	4.73 1.27	3.84 1.27
	4.68 1.19	2.78 1.07	4.50 1.00	3.37 1.16	5.44 1.03	2.72 1.51	4.95 1.24	2.89 1.09	4.11 1.03	4.85 1.22
3 { 額の広い 額の狭い	5.17 1.04	3.33 1.13	4.65 1.08	3.48 1.10	4.82 0.97	3.41 1.27	4.10 1.13	3.45 1.01	4.94 1.26	5.04 1.14
	3.20 1.06	4.77 1.07	4.19 0.99	3.87 0.98	3.72 1.06	4.32 1.11	3.37 1.10	4.08 0.93	3.70 1.29	3.35 0.97
4 { 頬のこけた 頬のふっくらした	2.85 1.18	5.04 1.00	4.19 1.06	4.15 1.10	3.06 1.02	5.06 1.05	3.25 1.22	4.52 1.04	4.15 1.10	3.02 1.30
	4.35 1.10	2.76 1.14	4.42 0.99	3.80 1.05	5.44 0.85	2.83 1.35	5.15 1.15	2.93 1.12	3.91 0.84	4.35 1.28
5 { 顔のきめの細かい 顔のきめの荒い	3.93 1.24	3.69 1.01	4.81 0.93	3.70 1.03	5.39 0.97	3.29 1.16	4.46 1.12	3.42 0.93	4.99 1.00	4.04 1.37
	4.63 1.35	3.89 1.09	4.01 1.07	3.95 1.10	3.57 1.11	4.35 1.15	3.23 1.08	4.10 0.98	3.81 1.06	4.56 1.27
6 { 色の黒い 色の白い	5.82 0.99	2.90 1.10	4.54 1.15	3.10 1.13	4.91 1.09	2.93 1.10	3.61 1.18	3.39 1.03	3.98 1.02	5.65 1.03
	2.74 1.14	4.24 1.16	4.56 1.09	4.00 1.12	4.67 1.16	3.95 1.26	4.43 1.14	3.48 1.05	4.77 1.17	3.08 1.20
7 { 血色のよい 血色のわるい	5.47 0.97	2.85 1.06	4.65 1.03	3.40 0.99	5.56 0.93	2.91 1.24	4.25 1.13	3.29 0.87	4.56 1.05	5.38 0.98
	2.33 0.96	5.08 1.16	3.86 1.04	4.61 1.07	2.80 1.13	5.29 1.12	3.46 1.17	4.69 1.05	3.75 1.22	2.50 1.00
8 { 髪の毛のやわらかい 髪の毛のかたい	3.58 1.18	3.83 0.98	4.57 0.93	3.91 1.09	5.40 0.98	3.22 0.97	4.60 1.11	3.33 1.05	4.81 1.01	3.73 1.26
	4.83 1.17	3.63 1.13	4.40 0.97	3.43 1.03	3.94 1.03	3.97 1.11	3.57 1.19	3.79 0.98	4.09 0.99	4.71 1.09
9 { 目のまるい 目の細い	5.21 1.09	3.26 1.05	4.44 0.92	3.64 0.96	5.30 0.99	2.95 1.20	4.23 1.00	3.45 0.88	4.35 0.97	5.31 1.05
	3.37 1.28	4.33 1.29	4.46 1.01	3.72 1.09	3.88 1.21	4.11 1.34	4.07 1.21	3.82 1.19	4.09 1.16	3.50 1.11
10 { あがり目の さがり目の	4.83 1.08	4.88 0.96	4.10 1.07	3.87 1.00	2.93 0.93	5.13 1.01	2.85 0.95	4.65 0.93	4.39 1.06	4.40 1.14
	2.50 1.22	3.59 1.22	4.06 0.81	4.14 1.08	4.65 1.07	3.13 1.29	5.03 1.06	3.35 1.17	3.46 0.99	3.89 1.32
11 { 目の大きい 目の小さい	5.40 0.97	3.25 0.98	4.52 0.94	3.59 0.96	5.21 0.90	3.00 1.11	4.25 1.00	3.39 0.87	4.44 0.95	5.11 1.04
	3.38 1.15	4.24 1.18	4.27 0.92	3.77 0.86	4.10 1.07	3.70 1.19	3.94 1.17	3.65 1.01	3.85 1.03	3.60 1.18
12 { まつ毛の長い まつ毛の短い	4.38 1.30	3.51 0.87	4.56 0.84	3.74 0.90	5.33 0.91	3.26 1.05	4.60 0.97	3.40 0.81	4.83 0.93	4.42 1.36
	4.00 1.23	4.00 0.99	4.26 0.89	3.78 0.95	3.98 0.88	3.88 0.99	3.65 1.05	3.91 0.82	4.03 1.03	4.02 1.12
13 { 眉の細い 眉の太い	3.93 1.40	4.64 0.86	3.98 1.02	4.32 1.09	3.63 1.18	4.65 1.09	3.44 1.08	4.28 0.95	4.21 1.25	4.39 1.36
	5.38 1.02	3.40 1.37	4.90 1.15	3.05 1.26	4.46 1.15	3.73 1.23	3.60 1.40	3.51 1.10	4.48 1.21	5.08 1.25
14 { 眉の八の字型の 眉の逆八の字型の	3.24 1.22	4.25 1.26	4.11 1.02	4.12 1.06	4.10 1.16	3.71 1.49	4.66 1.59	3.66 1.23	3.38 0.98	3.34 1.34
	4.84 1.28	4.54 1.26	3.96 1.26	3.63 1.30	3.27 1.30	5.01 1.33	2.77 1.37	4.39 0.98	4.23 1.12	4.39 1.41
15 { 鼻の高い 鼻の低い	5.27 1.14	4.05 1.12	4.59 1.16	3.73 1.30	4.27 1.11	4.63 1.14	3.38 0.90	4.33 0.94	5.41 1.18	5.09 1.27
	3.57 1.09	3.51 1.08	4.20 0.87	4.06 1.01	4.74 0.97	2.74 1.23	4.76 1.22	3.04 1.06	3.54 0.96	3.86 1.23
16 { 鼻の穴の小さい 鼻の穴の大きい	3.33 1.04	4.41 1.02	4.39 0.93	3.95 0.94	4.43 0.91	3.78 1.09	4.26 1.10	3.67 0.97	4.33 1.11	3.50 1.09
	5.11 0.97	3.14 1.08	4.04 1.02	3.65 1.15	4.11 0.95	3.62 1.11	3.62 1.33	3.62 1.06	3.56 1.04	4.81 1.06
17 { かぎ鼻の 鼻のまっすぐな	4.60 1.35	4.28 1.15	4.23 1.13	3.90 1.17	3.33 1.21	4.88 1.23	3.41 1.24	4.45 1.02	4.39 1.28	4.59 1.27
	4.90 1.15	4.05 1.11	4.96 1.10	3.37 1.18	4.71 1.16	4.42 1.22	3.61 0.92	4.04 0.98	5.49 0.92	4.90 1.18
18 { 口の小さい 口の大きい	2.77 1.09	4.25 1.21	4.78 1.06	3.88 1.19	4.98 1.11	3.95 1.30	4.44 1.25	3.48 1.18	4.74 1.15	3.00 1.13
	5.69 0.88	2.96 1.09	4.05 1.02	3.85 1.01	4.28 1.15	3.33 1.22	4.04 1.22	3.52 1.01	3.65 0.94	5.48 1.13
19 { 唇の厚い 唇の薄い	4.97 1.34	3.35 1.25	4.16 1.07	3.56 1.24	3.84 1.12	3.96 1.28	4.03 1.26	3.57 1.17	3.59 1.21	4.77 1.21
	3.57 1.45	4.56 1.06	4.47 1.10	4.07 1.10	4.02 1.02	4.48 1.11	3.55 1.00	4.16 0.92	4.76 1.17	3.83 1.27
20 { 口もとのゆるんだ 口もとのひきしまつた	3.84 1.39	4.44 1.22	2.91 1.15	5.17 1.12	3.13 1.34	4.48 1.37	4.43 1.37	3.98 1.03	2.50 1.10	3.84 1.37
	5.15 0.99	3.70 1.08	5.41 1.07	3.00 1.45	4.98 1.12	4.15 1.02	3.68 0.91	3.80 0.86	5.63 1.11	4.80 1.19
21 { 歯ならびのよい 歯ならびのわるい	5.16 1.12	3.32 1.21	5.06 0.96	3.02 1.17	5.76 0.98	3.02 1.23	3.97 0.95	3.29 1.06	5.40 1.07	5.04 1.20
	4.07 1.14	4.13 0.98	3.88 0.91	4.27 0.95	3.56 1.09	3.85 1.09	4.17 1.00	3.74 0.82	3.30 1.09	4.13 1.05
22 { 耳の大きい 耳の小さい	5.10 1.20	3.19 1.27	4.67 1.03	3.27 1.09	4.43 0.89	3.38 1.09	4.45 1.22	3.33 0.98	4.36 1.07	4.77 1.22
	3.12 0.98	4.61 1.01	4.17 0.97	4.22 0.92	4.17 0.74	3.98 0.88	3.82 1.10	3.95 0.94	4.03 1.04	3.34 0.95
23 { やせた ふとった	3.24 1.36	4.66 1.08	4.38 0.97	4.02 1.02	4.03 1.01	4.41 1.10	3.30 1.24	4.09 0.98	4.59 1.15	3.59 1.27
	3.98 1.28	2.83 1.26	4.52 1.08	3.62 1.16	4.87 1.04	2.72 1.12	5.35 1.04	2.94 1.06	3.71 0.96	4.27 1.41
24 { 背の低い 背の高い	4.07 1.32	3.80 1.16	4.44 0.90	3.63 1.10	4.43 1.04	3.09 1.06	3.77 1.11	3.41 1.00	4.16 1.00	3.98 1.08
	4.81 1.17	3.77 0.99	4.55 0.96	3.43 0.98	4.58 1.00	3.91 1.07	4.09 0.94	3.75 0.84	4.76 0.92	4.73 1.06
25 { 骨太の 骨の細い	5.32 1.03	2.99 1.19	4.72 1.18	3.00 1.20	4.59 1.00	3.50 1.12	3.94 1.40	3.43 0.95	3.92 1.02	5.22 1.06
	3.15 1.11	4.59 0.94	4.27 0.92	4.20 0.92	4.08 1.00	4.29 1.05	3.60 1.10	3.96 0.91	4.36 0.95	3.53 1.09

意であるが、他方では有意となっていない。さらに、両方の調査で関連性の方向が逆転している場合は皆無であった。関連性の方向が逆転している場合とは、たとえば、調査Ⅰで特性Aの持主がA'の持主よりも、相貌尺度X-X'の上で有意によりX的であると評定されているが、調査Ⅱでは特徴Xの持主はX'の持主よりも、

性格尺度A-A'において有意によりA'的であると判断されたような場合をさしている。このような、2つの方向からの評定によって矛盾するような関連性が示されているような特性と特徴の組合せが皆無であったことは、上述の4分の3以上の組合せにおいて共に有意な同方向の関連性が示されたこととともに、人びとが性

相貌と性格の仮定された関連性（1）

表5 対をなす刺激の平均評定値の差の有意性

	積 極 的 な	心 の ひ ろ い	分 別 の あ る	責 任 感 の あ る	感 じ の よ い	親 し み や す い	気 長 な	親 切 な	知 的 な	外 向 的 な	両 調 査 で 有 意 な 数
顔の大きい	** **	** **	** *	**		** **	** **	** **	× ×	** **	8
丸顔の	** **	** **		*	** **	** **	** **	** **	× ×	** **	8
額の広い	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	10
ほおのふっくらした	** **	** **	** **	*	** **	** **	** **	** **	×	** **	8
顔のきめの細かい	× ×	×	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	× ×	8
色の黒い	** **	** **	× ×	** **		** **	× ×		× ×	** **	7
血色のよい	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	9
髪の毛のやわらかい	× ×	**	**	**	** **	** **	** **	** **	** **	× ×	7
目のまるい	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	×	** **	6
さがり目の	× ×	** **	** **	× ×	** **	** **	** **	** **	× ×	× ×	8
目の大きい	** **	** **	*	** **	** **	** **	*	*	** **	** **	9
まつ毛の長い	* **	** **	** **	** **	** **	** **	** *	** **	** **	* **	9
肩の太い	** **	** **	** **	** **	** **	** **		** **	×	** **	8
眉の八の字型の	× ×	**	**	× ×	** **	** **	× ×	** **	× ×	× ×	7
鼻の高い	** **	× ×	** **	*	** **	× ×	** **	× ×	** **	** **	9
鼻の穴の小さい	× ×	× ×	** *	*	** **		**		** **	× ×	6
鼻のまっすぐな		** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	* **	7
口の大きい	** **	** **	× ×	× ×	× ×	** **	*	**	× ×	** **	7
唇の厚い	** **	** **	×	** **		** **	** **	** **	× ×	** **	8
口もとのひきしまった	** **	** **	** **	** **	** **	*	× ×		** **	** **	6
歯ならびのよい	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	9
耳の大きい	** **	** **	** **	** **	*	** **	** **	** **	*	** **	10
ふとった	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	** **	× ×	** **	8
背の高い	** **	**	**	**	**	× ×	×	× ×	** **	** **	5
骨太の	** **	** **	** **	** **	** **	** **	*	** **	× ×	** **	8
両調査で有意な数	24	19	14	14	19	23	18	21	21	22	195

性格特性と相貌特徴の間に暗黙のうちに仮定している関連性は、非常に明確なものであることを示唆しているといえよう。このことは、両調査の被験者が別のサンプルであったこと、および同じ調査の中で刺激の対をなす項目は別の被験者によって評定させられたということをおぼろげに考えあわせると、なお興味深い。

つきに、それぞれ250の組合せにおいて有意差がみられなかったケースの数を調べてみると、調査Ⅰで29であるのに対し、調査Ⅱでは38であった。差は有意ではないが、調査Ⅱの結果がやや一義性に欠けることが示唆されている。このことは調査実施中の被験者の反応の違いによっても裏づけられた。すなわち、評定の困難さを訴えることは、調査Ⅰよりも調査Ⅱにおいてはるかに多かつ

たのである。したがって、日常生活における印象形成の場合には通常は相貌特徴から性格特性を推論しているのであるが、調査においてはこれとは逆に、性格特性を与えられてそれからそのSPの相貌特徴を推定するほうがより容易である、ということができるようである。

両方向からの評定、つまり調査ⅠおよびⅡの結果でもに対をなす刺激の間の差が有意となったケースの数は刺激によって若干の差異がある。まず性格特性についてみても、表5の最下段に示すように、25の尺度で両調査で共に有意差のみられた尺度の数は14と24の範囲にある。相貌特徴との関連性がもっとも強いのは「積極的な-消極的な」であり、ついで「親しみやすい-親しみにくい」である。反対に「分別のある-分別のない」や



「責任感のある－責任感のない」では、関連性は比較的弱いことがわかる。つぎに相貌特徴の側からみてる。両調査で共に有意差のみられた性格尺度の数は、6～10の範囲にある。性格特性との関連性が強いものには「額の広い－額の狭い」, 「耳の大きい－耳の小さい」などがあり、比較的弱いものとしては「背の高い－背の低い」, 「目のまるい－目のほそい」, 「鼻の穴の小さい－鼻の穴の大きい」, 「口もとのひきしまった－口もとのゆるんだ」などがある。背の高さを除くと、性格特性との関連性の強弱を規定する一般的要因を見つけることは、本研究の結果からは、困難のようである。

これまでは、対をなす刺激の評定値の差から関連性をみてきた。性格特性なり相貌特徴なりのうち、どれが他方とより関連性が強いかをみるためのいま一つの方法がある。それは、対をなす刺激が尺度の中性点をはさんで両側に評定されているかどうかをみることである。両刺激の平均評定値に有意差があったとしても、ともに尺度の同じ側にある場合もある。反対に有意差はなくとも、2つの値が中性点をはさんで対称的な位置にあることもある。

表6は10の性格特性対別にそれを調べた結果である。表3から、各特性対が25の尺度のうちいくつにおいて4.00をはさんで対称的な値となっているか、またそのうち差が有意なものはいくつであるか、が「調査Ⅰ」の欄に示してある。同様に、表4の結果から、各特性尺度において、25の特徴対のうちいくつが対称性を示したかが、「調査Ⅱ」の欄に書かれてある。これによると、調査Ⅰよりも調査Ⅱの結果において、対称性の現われ方は性格特性間にバラツキが大きい。比較的よく対称性を示すのは「消極的な－積極的な」, 「心のひろい－心のせまい」, 「知的な－知的でない」などである。反対に「無分別な－分別のある」ではほとんど対称性は示していない。こ

表6 対をなす刺激の平均評定値の対称性 (性格特性別)

性格特性		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
調査Ⅰ, Ⅱ	対称な数	21	19	5	12	14	13	16	10	17	16	143
	有意に対称な数	17	16	1	6	8	10	9	5	12	12	96
調査Ⅰ	対称な数	22	24	19	23	22	25	20	23	25	19	222
	有意に対称な数	20	19	10	17	17	20	15	19	20	15	172
調査Ⅱ	対称な数	21	19	5	12	14	13	19	10	17	19	149
	有意に対称な数	17	16	1	6	9	10	13	6	14	14	107

表7 対をなす刺激の平均評定値の対称性 (相貌特徴別)

相貌特徴		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	計
調査Ⅰ, Ⅱ	対称な数	5	4	8	9	6	6	10	3	5	8	4	4	7	9	8	5	1	4	9	6	5	5	6	0	6	143
	有意に対称な数	5	2	6	7	4	3	8	2	3	7	3	0	3	5	5	4	1	4	3	4	3	4	5	0	5	96
調査Ⅰ	対称な数	9	9	10	10	8	8	10	8	10	9	9	10	8	10	9	10	8	8	9	8	7	10	8	9	8	222
	有意に対称な数	8	8	10	10	8	6	9	6	8	9	8	6	4	7	7	5	6	6	4	5	6	8	7	4	7	172
調査Ⅱ	対称な数	5	4	8	9	6	6	10	4	5	8	5	4	8	9	8	5	1	4	9	7	6	5	6	1	6	149
	有意に対称な数	5	2	6	7	4	4	9	3	3	7	4	1	5	6	5	5	1	4	3	5	3	4	5	0	5	106

の順位は表5に示された有意差の現われ方による順位とあまり相関していない。

同様に25の相貌特徴について対称性の現われ方をみてみたものが表7である。ここでも調査Ⅰよりも調査Ⅱにおいて、対称性はよりくずれているのがわかる。比較的よく対称性を示すものは「血色のよい－血色のわるい」, 「ほおのこけた－ほおのふっくらした」, 「眉の八の字型の－眉の逆八の字型の」, 「唇の厚い－唇のうすい」などである。反対に「背の低い－背の高い」, 「かぎ鼻の－鼻のまっすぐな」などではほとんど対称性は現われていない。

性格特性と相貌特徴の両者において、調査Ⅱで対称性が現われにくかったということは、先に述べた、性格→相貌の評定よりも相貌→性格の評定がより困難である、ということを書きしているといえよう。

### 3. 尺度の群化による分析

これまで、ある尺度上での評定値を、対をなす刺激の間で比較する、という観点から、個々の性格特性と個々の相貌特徴の間の関連性をみてきた。しかしながら、25の相貌尺度、あるいは10の性格尺度のそれぞれの内部にも一定の連関があるはずである。これを因子分析法および数量化の方法第Ⅲ類を用いて検討するならば、問題の解明に有用な情報が得られるかもしれない。

#### (1) 因子分析法による検討

調査Ⅰにおいては、合計20個の刺激特性のおのおのに対して、25の相貌尺度上での評定値が得られている。すべての性格特性に関する資料を合わせて、25の尺度上での評定値について因子分析をしてみた。セントロイド法により5因子まで抽出し、バリマックス回転をした。結果は因子負荷量の行列の形で表8に示してある。第5因子は全般に負荷量が小さいので、最初の4因子について解釈を試みた。

第1因子に負荷量の高い尺度は、「目の大きい－目の小さい」, 「目のまるい－目の細い」, および「まつ毛の長い－まつ毛の短い」である。したがって、第1因子は目の大きさの因子と解釈される。第2因子は、負荷量の高いのが「口の小さい－口の大きい」, 「鼻の穴の小さい－鼻の穴の大きい」, 「唇の厚い－唇の薄い」, 「色

相貌と性格の仮定された関連性 (1)

の黒い一色の白い」, 「骨太の一骨の細い」, および「顔の大きい一顔の小さい」の6尺度であるところからして、華奢の因子と解釈される。つぎに第3因子は、負荷量の高い尺度が「ほおのこけた一ほおのふっくらした」, 「あがり目の一さがり目の」, 「面長の一丸顔の」, 「やせた一ふとった」, 「血色よい一血色のわるい」, 「眉の八の字型の一眉の逆八の字型の」, および「鼻の高い一鼻の低い」であるから、線の鋭さの因子と解釈される。最後に第4因子であるが、これは先の3因子よりも解釈はより困難である。しかし、「口もとのゆるんだ一口もとのひきしまった」, 「歯ならびのよい一歯ならびのわるい」の2尺度で負荷量が高いところから、口もとのしまりなさの因子と解釈しておこう。

調査Ⅱの資料についても、50個の相貌特徴を合わせ、同様な方法で10の性格尺度の間で因子分析を行なった。第3因子まで抽出し、回転した結果は表9に示す通りである。

第1因子に負荷量の高い尺度は、「親しみやすい一親しみにくい」, 「親切な一不親切な」, 「感じのわるい

表8 相貌尺度の因子行列

相貌 尺度	因子	1	2	3	4	5	$h^2$
1		.14	-.53	-.36	-.12	.19	.48
2		-.18	.20	.65	-.01	.14	.51
3		.37	-.18	-.31	-.45	.16	.49
4		-.30	.21	.74	.22	-.00	.73
5		.24	.48	-.16	-.25	.22	.42
6		.14	-.55	-.09	-.09	-.23	.39
7		.46	-.25	-.53	-.42	-.08	.73
8		.32	.42	-.28	-.11	.24	.43
9		.70	-.16	-.34	-.08	-.02	.64
10		-.16	-.15	.66	-.15	-.16	.53
11		.72	-.20	-.15	-.18	-.00	.61
12		.61	.10	-.06	-.15	.16	.43
13		-.12	.51	.22	.16	.08	.35
14		.21	.18	-.51	.07	.22	.39
15		.13	.05	.51	-.42	.10	.47
16		-.06	.61	.10	-.18	.07	.42
17		-.34	-.24	.23	.31	.00	.32
18		-.15	.68	.14	-.15	.05	.52
19		.13	-.57	-.15	.14	.15	.40
20		-.20	-.17	-.13	.61	.10	.46
21		.35	.21	-.12	-.55	.09	.49
22		.25	-.42	-.15	-.27	.19	.37
23		-.03	.34	.64	-.08	-.09	.55
24		-.19	.08	-.25	.34	-.07	.23
25		.09	-.55	-.28	-.15	.07	.41
寄与率		.10	.14	.14	.07	.02	.47

表9 性格尺度の因子行列

性格 尺度	因子	1	2	3	$h^2$
1		-.07	.84	.06	.72
2		.57	-.39	-.08	.48
3		-.21	.04	.66	.49
4		.22	-.25	-.50	.36
5		-.66	.15	.34	.57
6		.73	-.16	-.02	.56
7		-.55	-.17	.01	.33
8		.69	-.04	-.15	.51
9		-.01	.09	.60	.37
10		-.10	.83	.07	.71
寄与率		.22	.17	.12	.51

一感じのよい」, 「心のひろい一心のせまい」, 「短気な一気長な」の5因子である。したがってこれは、とりつきやすさの因子と解釈される。これに対して第2因子では、「消極的な一積極的な」, 「内向的な一外向的な」の2尺度で負荷量が高いから、消極性の因子と解釈する。最後に第3因子の負荷量の高い尺度が「無分別な一分別のある」, 「知的でない一知的な」, 「責任感のある一責任感のない」の3尺度であるところから、これは知性のなさの因子と解釈される。

このように、相貌尺度の因子が4、性格尺度の因子が3抽出され、解釈されたので、それぞれの尺度を主として負荷している因子によって分類することが可能となると考えられる。まず相貌尺度では、それぞれ第1～第4因子に0.5以上の負荷量をもつ尺度を第Ⅰ～第Ⅳ群とし、それ以外の尺度を第Ⅴ群とする。つぎに性格尺度の場合も、同様に第Ⅰ～第Ⅲ群が定義される。この場合はそのいずれにも属さない尺度はなかった。

表5は、対をなす2つの刺激の平均評定値の差を、5%および1%の水準で表わしたものである。全般に差が有意となったケースが非常に多かったため、どのような性格特性群と相貌特徴群の間に関連性がとくに強くみられるか、はこの表から読みとることができない。そこで上述のように群に分けて、 $|t| > 10.0$ 以上の場合のみを表記したのが表10である。

この表の読み方は、属性の順を入れ替えたことと、関連性の基準を厳しくしたこと以外の点では、表5と同じである。これから、調査Ⅰでは84(250のうちの34%)、調査Ⅱでは58(23%)の組合せにおいてtの値が基準を越え、強い関連性があることがわかる。

性格特性群、相貌特徴群の間での関連をみると、性格の第Ⅰ群と相貌の第Ⅲ群、性格の第Ⅱ群と相貌の第Ⅰ群および第Ⅱ群、性格の第Ⅲ群と相貌の第Ⅳ群の間に、それぞれ強い結びつきがあることがうかがわれる。すなわ

ち、「とりつきやすい」性格の人は「線のやわらかい」相貌の持主であり、「消極的な」人は相貌的には「目が小さく」「華奢な感じ」をもっており、また「知性に欠ける」人は「口のあたりにしまりがなく歯ならびが悪い」人である、というように見られる傾向がある、ということができるようである。

## (2) 数量化の方法第Ⅲ類による分析

性格特性と相貌特徴の間のグローバルな連関を明らかにするため、調査Ⅰの資料に数量化の方法第Ⅲ類（パターン分類）を適用してみた。分析にさいしては、ある被験者のある性格特性の持主（SP）に対して、それぞれの相貌尺度上で評定した資料を1サンプルとして扱った。なおこの資料は7点尺度で得られているが、これを「どちらでもない」（4点）を基準として、それより左（1

～3点）と右（5～7点）の3カテゴリーにまとめて分析する。このため、分析されるサンプルの数は2520、項目カテゴリー数は75（25尺度×3尺度区分）となる。分析のための計算プログラムは「社会科学のための統計パッケージ（SPSS-V5）」を使用し、第5軸まで解を求めた。

表11は第1軸から第4軸までの固有値および固有ベクトル（カテゴリ・スコア）を示す。第1軸は「小さく尖鋭一大きく鈍角」の次元、第3軸は「顔のソフトな感じーラフな感じ」の次元、そして第4軸は「ゆるんだ感じーひきしまった感じ」の次元であると解釈される。なお第2軸は尺度の内容的特質ではなくて、反応の分布の特質を示す次元と解釈される。すなわち、「どちらでもない」の反応とそれ以外の相対的に極端な反応を分ける特

表10 尺度群別にみた性格と相貌の関連性

相貌特徴	性格特性					Ⅱ		Ⅲ		
	親しみやすい	親切な	I 感じのよい	心のひろい	気長な	積極的な	外向的な	分別のある	知的な	責任感のある
I 目の大きい	*		*	*		*	*			
目のまるい	*	*	*	*		*	*			
まつ毛の長い			*	*						
口の大きい				*		*	*			×
鼻の穴の小さい						×				
唇の厚い				*						
Ⅱ 骨太の				*	*	*	*			
色の黒い						*	*	*		
顔の大きい				*	*	*	*			
眉の太い					*	*				
はおのふっくらした	*	*	*	*	*	*	*			
さがり目の	*	*	*	*		*	*			×
丸顔の	*	*		*	*					×
Ⅲ ふとった	*	*	*	*	*	*	*			×
血色のよい	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
眉の八の字型の	*	*				×	×			
鼻の高い	×	×	×			*	*		*	*
Ⅳ 口もとのひきしまった			*	*				*	*	*
歯ならびのよい			*	*				*	*	*
額の広い	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
顔のきめの細かい			*	*					*	
Ⅴ 髪の毛のやわらかい			*	*						
鼻のまっすぐな	*		*							
耳の大きい				*		*	*			
背の高い						*	*			

相貌と性格の仮定された関連性 (1)

殊な次元であると考えられる。

ここで、第1軸、第3軸、および第4軸から構成される3次元空間における各特徴カテゴリーの位置(座標)を考える。すなわち、「どちらでもない」を除いた50の相貌特徴カテゴリーを、それぞれが各軸でプラス・マイナスのいずれの値をとっているかによって、8つの群に分類した。それが表12の左半分に示されている。表で、例えば、第2群〔++-〕は、カテゴリー・スコアが第1軸でプラス、第3軸でプラス、第4軸でマイナスとなっているような相貌特徴をグループにしたものである。したがって、同じ群に分類される特徴カテゴリーは、その意味内容が相互に「近い」と言える。

つきに、相貌特徴の各群に対して、どのような性格特

性が関連しているかを検討しよう。そのためには、相貌特徴カテゴリーが位置づけられたと同じ空間に性格特性を位置づければよい。数量化の方法第Ⅲ類は、「項目」と「サンプル」を同時に分類する手法であり、そこでは因子分析における因子得点と同様、各サンプルの各軸に対する得点(サンプル・スコア)が与えられる。したがって、本研究では、2520のサンプルを性格特性刺激別に20のグループに分け、各グループのサンプル・スコアの重心が先の3次元空間のどの象限にあるかによって、各性格特性を位置づけることにした。結果は表12の右側に示されている。例えば、〈やせた〉、〈背の高い〉、〈面長の〉、〈鼻の高い〉といった相貌特徴群に対しては、《知的な》という性格特性が関連していることがわかる(第

表11 数量化の方法第Ⅲ類による相貌特徴の固有ベクトル行列

次 元 固有値 カテゴリー区分 項 目		第 1 軸			第 2 軸			第 3 軸			第 4 軸		
		0.255			0.223			0.139			0.099		
		1点 1	4点 4	5点 5	1点 1	4点 4	5点 5	1点 1	4点 4	5点 5	1点 1	4点 4	5点 5
		3点 3		7点 7	3点 3		7点 7	3点 3		7点 7	3点 3		7点 7
1.顔の大きい	-顔の小さい	-40	-28	66	54	-61	-11	-28	0	31	-3	-21	20
2.面長の	-丸顔の	55	-19	-48	-1	-65	48	19	-12	-12	-42	-11	56
3.額の広い	-額の狭い	-42	-30	-62	45	-53	-12	30	1	-31	-21	3	20
4.頬のこけた	-頬のふっくらした	70	-25	-55	-23	-53	44	-8	14	2	-19	-31	31
5.顔のきめの細かい	-顔のきめの荒い	10	-26	29	34	-43	25	81	-5	-102	22	3	-35
6.色の黒い	-色の白い	-24	-32	49	48	-45	3	-50	-10	49	-54	-2	46
7.血色のよい	-血色の悪い	-54	-13	69	40	-52	-26	19	4	-24	-12	7	12
8.髪の毛のやわらかい	-髪の毛のかたい	-1	-23	53	48	-41	32	82	-7	-85	52	0	-63
9.目のまるい	-目の細い	-49	-29	73	62	-59	-6	28	-6	-21	2	-9	7
10.あがり目の	-さがり目の	49	-31	-19	-2	-37	37	-24	30	-4	-93	-13	105
11.目の大きい	-目の小さい	-44	-22	74	61	-55	1	38	-10	-28	-34	-4	41
12.まつ毛の長い	-まつ毛の短い	-12	-21	70	64	-38	26	78	-7	-71	-16	2	13
13.眉の細い	-眉の太い	58	-34	-24	0	-44	51	31	0	-35	28	18	-52
14.眉の八の字型の	-眉の逆八の字型の	-12	-26	44	40	-32	-5	10	25	-41	84	-10	-82
15.鼻の高い	-鼻の低い	29	-26	1	15	-44	44	48	-6	-49	-98	9	103
16.鼻の穴の小さい	-鼻の穴の大きい	59	-24	-8	21	-37	61	76	4	-90	26	3	-34
17.かぎ鼻の	-鼻のまっすぐな	55	-28	-4	4	-40	43	-72	-14	61	-32	26	-8
18.口の小さい	-口の大きい	54	-31	-24	1	-57	50	69	1	-67	35	-13	-21
19.唇の厚い	-唇の薄い	-20	-38	52	49	-44	1	-67	12	44	-17	-2	17
20.口もとのゆるんだ	-口もとのひきしまった	13	-17	0	13	-44	15	-78	7	55	58	40	-66
21.歯ならびのよい	-歯ならびのわるい	-15	-18	53	50	-45	12	74	-6	-91	-35	19	14
22.耳の大きい	-耳の小さい	-33	-21	75	67	-43	10	-7	2	4	-45	-3	54
23.やせた	-ふとった	60	-32	-40	-10	-44	53	36	0	-42	-31	-29	64
24.背の低い	-背の高い	28	-18	15	42	-38	45	-30	-8	41	95	3	-88
25.骨太の	-骨の細い	-31	-28	71	64	-42	5	-40	-4	44	-40	9	23

注1) 25の相貌特徴対(項目)はすべて、7点尺度(尺度の左側から1点~7点)で評定されているが、本分析では、これを1点~3点、4点、5点~7点の3つのカテゴリーにまとめ直した。

注2) SPSSで求まるスコアは、固有ベクトルを各軸毎に平均=0 分散=固有値 となるように標準化したものである。表中のスコアは、この値を10<sup>3</sup>倍して表示してある。

Ⅱ群)。

因子負荷量に従って尺度を数個の群に分類し、相貌特徴群と性格特徴群の間の関連性をみた表10の結果と、この表12の結果の間には一定の対応関係がみられるようである。すなわち、表10における特徴群と特性群の組合せのうち、Ⅰ×Ⅱ、Ⅱ×Ⅱ、Ⅲ×Ⅰ、およびⅣ×Ⅲは、表12におけるそれぞれ第Ⅵ群、第Ⅷ群、第Ⅴ群、および第Ⅵ群にはほぼ対応しているとみることができる。このことから、個々の相貌特徴と性格特性の間の関連性ではなくて、相貌特徴群と性格特性群の間の関連性という方向に分析の観点を移すことの可能性が示唆された、ということができよう。

## 要 約

本研究は、implicit personality theoryの究明の第1歩として、どの相貌的特徴とどの性格特性の間に一般に関連性が仮定されているかを、評定という方法を用いて間接的に明らかにすることを目的としている。被験者は女子大学生で、評定にさいしては自分と同性、同年輩の人

を想定するように教示された。

まず調査Ⅰでは、性格から相貌が評定せしめられた。すなわち、各1個の性格特性によって記述された刺激人物(SP)を、25個の尺度(7点)のそれぞれの上で評定することが求められた。用いた性格特性は合計10対20個であったが、1人の被験者には対をなさない10個の特性を、2回に分けて評定させた。標本数は253。

またこれとは別に、評定の信頼性をチェックするために、2群(54名と51名)の被験者に、1週間の間隔をおいて5名のSPを再評定させた。

調査Ⅱでは、調査Ⅰとは逆に、被験者は、相貌から性格を推定することが求められた。すなわち、各1個の相貌特徴が記述されたSPを、調査Ⅰで刺激として用いられた10対の性格特性により構成された10の7点尺度のおのおの上において評定させた。刺激として用いた相貌特徴は、調査Ⅰで評定尺度を構成していた25対50個である。1人の被験者には、対をなさない25の相貌特徴が2回に分けて与えられた。標本数は251。

主な結果は次のとおりである。

表12 相貌特徴と性格特性のグルーピング

郡 (象限)	相 貌 特 徴	性 格 特 性
第Ⅰ群〔+++〕	骨の細い、色の白い、顔の小さい、 顔のきめの細かい、眉の細い、耳の小さい、 鼻の穴の小さい、唇のうすい、口の小さい	消極的な、 心のせまい、 内向的な
第Ⅱ群〔++-〕	やせた、背の高い、 面長の、 鼻の高い	知的な
第Ⅲ群〔+-+〕	背の低い、血色のわるい、額のせまい、 目の細い、目の小さい、まつ毛の短い、 鼻の低い、口もとのゆるんだ、歯ならびのわるい	責任感のない
第Ⅳ群〔+--〕	髪の毛のかたい、顔のきめの荒い、 眉の逆八の字型の、あがり目の、 ほおのこけた、かぎ鼻の	無分別な、短気な、 感じのわるい、不親切な、 親しみにくい
第Ⅴ群〔-++〕	髪の毛のやわらかい、 眉の八の字型の、目のまるい、 ほおのふっくらした	感じのよい、 親しみやすい、 親切的な
第Ⅵ群〔-+-〕	血色のよい、額の広い、目の大きい、 まつ毛の長い、鼻のまっすぐな、 口もとのひきしまった、歯ならびのよい	分別のある、 責任感のある、 外向的な
第Ⅶ群〔--+〕	ふとった、 丸顔の、 さがり目の	心のひろい、 気長な、 知的でない
第Ⅷ群〔---〕	骨太の、色の黒い、顔の大きい、 眉の太い、耳の大きい、 鼻の穴の大きい、唇の厚い、口の大きい	積極的な

1. 調査 I での信頼性の検討において、2 回の評定値間の相関係数の中央値は、特性ごとにみると、0.34 ~ 0.53 の範囲にあった。また有意でない相関係数は 250 のうち 41 (16.4%) あった。このことから、評定の信頼性はあまり高いとはいえない。

2. 対をなす 2 刺激の各尺度上での評定の平均値の間の差は、調査 I で 88.4%, 調査 II で 84.8% のケースにおいて有意であった。また両調査で同じ方向に差が有意であったのは、250 のケースのうち 78.0% であった。両調査で逆方向に有意差の出たケースは皆無であった。

3. 対をなす 2 刺激の各尺度上での平均評定値が、尺度の中性点をはさんで両側に来ているケースは、調査 I で 88.8%, 調査 II で 59.6%, 両調査で共にそうになっているケースは 57.2% であった。

4. 上記 2 および 3 の結果から、人びとが相貌と性格の間に仮定している関連性はかなり強いといえる。また性格から相貌を推定する場合のほうが、その逆方向の推定をする場合よりも、容易であるばかりでなく、関連性もよりはっきりと現われるようである。

5. 25 の相貌尺度上での評定結果を 20 の性格特性すべてについて合わせて、因子分析をした結果、次のように解釈される 4 因子が抽出された。すなわち、目の大きさの因子、華奢の因子、線の鋭さの因子、および口もとのしまりのなさの因子である。10 の性格尺度上での評定結果を同様に因子分析したところ、とりつきやすさの因子、消極性の因子、および思慮のなさの因子の 3 つが見いだされた。

6. 各因子に対する負荷量から、相貌尺度を 4 群、性格尺度を 3 群に分類し、群と群の間で関連性をみてみたところ、次のようなものが見いだされた。すなわち、とりつきにくさ—線の鋭さ、消極性—目の小ささおよび華奢、ならびに思慮のなさ—口もとのしまりのなさ、である。

7. 調査 I のデータに数量化の方法第 III 類を適用し、性格特性と相貌特徴の間のグローバルな関連性を検討したところ、上記 6 とほぼ同様の結果が得られた。

## 文 献

- Anderson, N. H. 1962 Application of an additive model to impression formation. *Science*, 138, 817-818.
- Anderson, N. H. 1975 Cognitive algebra. In L. Berkowitz (ed.) *Advances in experimental social psychology*, 8, New York: Academic Press.
- Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Bruswik, E. 1947 *The conceptual framework of psychology*. Chicago: University of Chicago Press.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley.
- Johnson, L. 1955 Stereotypes and perceptual distortion. cited in P. F. Secord 1958.
- Kelley, H. H. 1950 The warm-cold variable in first impression of persons. *Journal of Personality*, 18, 431-439.
- Kretschmer, E. 1936 *Körperbau und Charakter*. Auf 1. Berlin: Springer.
- 相場 均訳 体格と性格 1921 文光堂
- 大橋正夫, 小川浩, 長戸啓子, 長田雅喜, 三輪弘道, 千野直仁 1971 パーソナリティの印象形成における情報統合過程の研究(1)——平均モデルの予測可能性に影響する諸要因について——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 18, 43-60
- 大橋正夫, 三輪弘道, 長戸啓子, 平林進 1972 写真による印象形成の研究——序報——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 19, 13-25
- 大橋正夫, 三輪弘道, 平林進, 長戸啓子 1973 写真による印象形成の研究(2)——印象評定のための尺度項目の選定——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 20, 93-102
- 大橋正夫, 小川浩, 長田雅喜, 千野直仁, 長戸啓子, 三輪弘道, 平林進 1973 パーソナリティの印象形成における情報統合過程の研究(3)——面接法によるアプローチ——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 20, 61-76
- Orne, M. 1962 On the social psychology of the psychological experiment: With particular reference to demand characteristics and their implications. *American Psychologist*, 17, 776-783.
- Secord, P. F. 1958 Facial features and inference processes in interpersonal perception. In Tagiuri, R. & Petrulo, L. (eds.) *Person perception and interpersonal behavior*. Stanford: Stanford University Press.
- Sheldon, W. H. & Stevens, S. S. 1942 *The varieties of temperament*. New York: Harper.
- 依田新 1968 性格心理学 金子書房

ASSUMED RELATIONSHIP BETWEEN PHYSIOGNOMIC FEATURES  
AND PERSONALITY TRAITS

– Examining the Differences between Rating Scores of Stimulus Persons Composing Counterparts –

Masao OHASHI, Keiko NAGATO, Susumu HIRABAYASHI, Toshikazu YOSHIDA,  
Fumitoshi HAYASHI, Toshimitsu TSUMURA, and Hiroshi OGAWA

The present investigation aims at, as a first step for exploring implicit personality theories one holds, examining which physiognomic features are, in general, assumed to be related to which personality traits.

Female undergraduates served as Ss. Two questionnaires were administered to separate samples. In Questionnaire I, Ss were made to rate some of the stimulus persons (SPs) on twenty-five seven-point scales described by two mutually antonymous physiognomic features each. SPs were described by one of twenty personality traits, composing ten pairs: the two are counterparts. N of Ss was 253. In addition, some Ss rated the identical SPs twice with an interval of a week on the scales, the purpose being to check the reliability of the rating. In Questionnaire II, stimuli and rating scales used in Questionnaire I were reversed; SPs described by single physiognomic features were rated on personality scales. N of Ss was 251. In the both questionnaires, no stimuli composing any pair were presented to the same Ss.

Major findings obtained are as follows:

1. In order to check reliability, correlation coefficients between test and retest were calculated for each SP and for each scale. Median  $r$ 's for ten SPs ranged from .34 to .53, being by no means so high.
2. There are 250 combinations of 25 physiognomic features and 10 personality traits. In many of them, significant differences were found between average rating scores of SPs described by counterparts of the stimulus-pair. The percentages of combinations with such significant difference were 88.4 in Questionnaire I, 84.8 in Questionnaire II, and 78.0 in the both questionnaires combined. These percentages are unexpectedly high, meaning that the assumed relationship between the physiognomic features and the personality traits is strong enough.
3. From a factor analysis of ratings on the 25 physiognomic scales, four factors were extracted. They were interpreted as follows: the largeness of eyes, the slender frame, the sharpness of the face and the loosely closed mouth. In a similar way, three factors were extracted from the ratings on the 10 personality scales: sociability, passiveness, and indiscretion.
4. According to their factor-loadings to the factors, physiognomic scales were classified into four, and personality scales into three, groups. Some coordinations between the both kinds of groups were observed: unsociability with sharpness of the face, passiveness with smallness of eyes and slender frame, and indiscretion with loosely closed mouth.
5. "The Method of Quantification III" developed by C. Hayashi was applied to the data in Questionnaire I. A similar coordination was observed between the groups of physiognomic scales and those of personality scales.